国際移住者の価値意識
――シュワルツ理論上の価値志向を用いた著作分析――

Value Consciousness of International Migrants
－Through Book Analysis with Schwartz's Basic Values and Cultural Value Orientations－

村松　英男[1]・石井　大一朗[2]
MURAMATSU Hideo, ISHII Daiichiro

[1]宇都宮大学大学院地域創生科学研究科博士後期課程
[2]宇都宮大学大学院地域創生科学研究科准教授

宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要『地域デザイン科学』第10号

論　文

宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要『地域デザイン科学』第 10 号　117-132

国際移住者の価値意識
――シュワルツ理論上の価値志向を用いた著作分析――

Value Consciousness of International Migrants

－Through Book Analysis with Schwartz's Basic Values and Cultural Value Orientations－

村松　英男[1]・石井　大一朗[2]

MURAMATSU Hideo, ISHII Daiichiro

本研究は、日本への国際移住者の日本人に対する価値意識を評価するための分析枠組みとして、シュワルツ理論の妥当性を確認しつつ、現代の日本への国際移住者の価値意識に必要な新たな分析視点を得ることを目的としている。調査はまず先行研究をもとに価値の定義とシュワルツ理論を整理する。その上で、2001 年以降の国際移住者の 9 著作をもとに、著作における日本の生活空間や日本人との関わりに関する表出箇所を抜き出し、シュワルツ理論の枠組みを用いて KJ 法による分析を行なった。分析の結果、シュワルツ理論が掲げる 7 つの価値志向が日本への国際移住者の価値意識を評価する上で妥当であること、また、その価値志向が概ね移住前の文化特性の傾向に類似することが確認された。一方で分析枠組みに当てはまりにくい「共同体主義（集団主義とは異なるコミュニティ中心主義）」、「多文化主義」（排外主義や同化主義の対極に位置する多様性の価値）といった価値意識があることが確認された。なお、本研究における国際移住者とは、International Migrants のことを示す[1]。

キーワード：国際移住者、価値志向、文化特性、シュワルツ理論、著作分析

Ⅰ．はじめに

1. 研究の背景

日本に在住する国際移住者は、日本人社会を肯定的にとらえる一方で、具体的には、コミュニティの一員になりにくいなど、否定的にとらえる傾向も強い（金、2015）。そして、それが世界的傾向の排他主義（ホーキンス、ヴァージル、2018）のよるものなのか、「日本人らしさ」によるものなのか、当の日本人もよく整理できていない（平井、1999）。しかし、ホスト社会と国際移住者がお互いにとっての優先価値を認識することで、よりよい共生が実現することに関しては論を待たない。本稿では、国際移住者の日本在住経験に基づいた知見が重要であることを踏まえ、日本に在住した国際移住者が日本社会をとらえる視点としてどのような価値意識を持っているのか、その分析視点を得ることを目的としている。その方法としては、世界価値観調査（本稿Ⅱ-2-(4)を参照）の調査項目

1　宇都宮大学大学院地域創生科学研究科博士後期課程　21muramatsu@gmail.com
2　宇都宮大学大学院地域創生科学研究科准教授　ish@cc.utsunomiya-u.ac.jp

を用いて調査票調査を行う、あるいはインタビュー調査を行う方法、また文献調査による方法などが考えられる。本稿では、日本に在住した国際移住者の価値意識といったこれまでに十分研究蓄積のない問題領域を対象とするにあたり、より客観的な知見を得る方法の一つとして、近年発行されている著作物を通して日本に在住した国際移住者の価値意識を把握しようとするものである。これにより、今後の国際移住者の価値意識を把握するための基礎的な分析視点を得ることができると考えられる。また、その有効性を過去の研究成果と比較検討し、検証する。もとより文化やエスニシティも異なる人々が、日本人社会での生活経験を通して得た知見は客観性に富む。

2. 研究の目的

コミュニティの一員としての国際移住者とホストとのより良い共生に向けて、国際移住者の価値意識を明らかにし、それをホスト側が知ることが必要である。本研究は、その価値意識を測るための分析枠組みに関する先行研究を整理し、レファレンス・スタディとしてその測定軸の有効性を確認するものである。

Ⅱ. 先行研究と本研究の位置づけ

本章では価値意識を扱う先行研究を概括しつつ、本研究の位置づけを確認する。そして、先行研究の本研究に応用可能な価値意識の概念枠組みを選定したい。以下に、特に本研究が扱う日本の生活空間[2]を対象とした「価値の定義」および「価値意識を測る分析軸」を扱う先行研究を整理する。

1. 価値の定義

戦後において価値の定義を扱い、他の論文や著作において引用の多い主なものを挙げると次の 5 つになっている。Kluckhohn、1951、（人類学者）は、Values and value orientations in the theory of action. の中で価値について以下のように述べている。“A conception, explicit or implicit, distinctive of an individual or characteristic of a group, of **the desirable** which influences the selection from available modes, means and ends of action.”「行為者にとって可能な、行為の様々なやり方、手段、目的の中から選択するにあたって影響を与えるところの『**のぞましきもの**』(the desirable）に関して、個人あるいは集団が抱いている、明示的あるいは暗黙の概念である。」（見田訳、価値意識の理論、1966）また、見田宗介、1962、（社会学者）は価値意識の理論のまえがきで価値について次のように述べている。「人間の幸福とか善の問題、社会の理想像の問題、あるいはまた社会の中で諸個人の行為を方向づけるとともに、彼らの人生に『意味』を与える内面的な要因群の問題である。」これらの定義は、行為者や選択に着目していることが特徴である。次に、Kluckhohn や見田とは異なる視点から、Rokeach、1973、（心理学者）は The nature of human values. の中

で価値を次のように定義している。“An enduring organization of beliefs concerning preferable modes of conduct or end-states of existence along a continuum of relative importance.”「特定の行動の在り様や存在の究極の状態（目標）が、反対のそれよりも、個人的あるいは社会的に好ましいとする、持続的な信念である。」（坂野訳、「価値」の機能とは何か、2012）また、Hofstede 、1991、（社会心理学者）は多文化世界（岩井訳、1995）の中で以下のように価値を定義している。「ある状態の方が他の状態よりも好ましいと思う一般的傾向を価値観と定義する。それは、『望ましいもの』と『現実に求めるもの』がある。」これら Rokeach と Hofstede は、「より好ましいもの」を信念と傾向ととらえて定義しているのが特徴である。さらに、最も近年、包括的な観点から価値を評価したものに Schwartz、1992、（社会心理学者）は Universals in the Context and Structure of Values: Theoretical advances and empirical tests in 20 countries. があり、その中で価値について以下のように述べている。“The criteria people use to select and justify actions and to evaluate people（including the self） and events.”「価値とは人間が行動を選択するために、そして、自身を含め他人や出来事を評価するために使用する基準である」（筆者訳、2021）

以上、過去の価値研究の中で、価値の定義の主なものを整理した。いずれも、概念、要因群、信念、傾向、基準、として価値の異なる機能を想定している。そして、その機能の中で、基準として定義しているのが、シュワルツである。1990 年以前の価値を扱う研究をもとに、客観的な調査により価値の評価項目を導きだしていること、また、シュワルツの理論は、人や事物を評価するための基準の項目が多く、本研究の研究関心と一致していることから、価値の定義についてシュワルツの定義を採用している。

2. 価値研究の概括概要と特徴

次に、価値意識を把握する研究について、代表的なものの概要と特徴を年代順に整理する。

(1) クラックホーンとストロッドベック（1961）

米国南西部の 5 つのコミュニティ（スペイン系アメリカ人、テキサス農業従事者、モルモン教徒、北米先住民族ナホバゾ族、北米先住民族ズニ族）を調査し、価値志向を次の 5 つに整理した。①時間（過去、現在、未来のうち、どこを優先させるか）②人間と自然の関係（征服、服従、調和）③個人と他者との関係性（階級、平等、個人の利益に従うか）④ふるまいの根本的な動機（自己表現、自己成長、何事かを達成するため）⑤人間の性善性（善、悪、混合）

(2) 見田宗介（1962）

価値を「主体の欲求をみたす、客体の性能」と定義し、その一般的な機能を「意識的行為における選択の基準」とみなす。そして、価値意識の構造と機能を、時間的パースペクティヴと社会的パースペクティヴの次元における 4 つの軸（幸・不幸、美・醜、善・悪、真・偽）との組み合わせで

次の 4 つに価値を整理した。①快・苦　②愛・憎　③利・害　④正・邪　1973 年から 5 年に一度、NHK 放送文化研究所による「日本人の意識」調査では、この見田の価値類型に基づく 4 個の生活目標を選択する項目がある。

(3) ロキーチ（1973）

望ましい究極の在り方（最終価値）とそれに到達するために必要な状態（手段価値）を上位価値として設定し、それぞれの下に書く 18 の下位価値を整理した。これは初期の価値に関する体系的理論として位置づけられ、RSV（Rokeach Value Survey）調査方法が提案された。本稿では、最終価値、手段価値のそれぞれ 18 の下位価値に関しは紙幅の制限上、省略する。

(4) イングルハート（1977）

1981 年から 5 年ごとに行われている国際プロジェクト、「世界価値観調査」（100 か国を超え、世界人口の 90%以上をカバーする対象国（イングルハート、2018）への 250 問のアンケート調査で、各国 1000 人～3500 人が参加している）のベースとなった以下の 2 次元に価値観をまとめた。①伝統的価値　vs　非宗教的・理性的価値　（縦軸）　②生存価値　vs　自己表現価値　（横軸）　ここでは、伝統的価値を重んじる社会では、宗教の影響が強く、伝統的慣習が残っている。自己表現価値を重んじる社会は脱物質主義の傾向が強いことを指摘している。

(5) ホフステッド（1980）

全世界、40 か国の IBM 支社従業員 11 万人に価値に関するアンケート調査を行い、国別スコアを算出した。そして、各国のスコア分析し、次の、国民文化に関する 4 つの特性を抽出した。①権力格差　②個人主義（対集団主義）　③男らしさ（性別社会的役割として男性的（自己主張と競争）、女性的（配慮や環境志向）を区別した）④不確実性の回避（これが高いと法、規則、安全が重んじられる）

(6) シュワルツ（1992、2004、2006）

20 か国の学校の先生と学生を対象に調査票調査を実施して得られたデータから、優先価値を抽出した。当初、次の 10 の価値観を連続環状形で表現した。普遍、慈悲、伝統、調和、安全、権勢、達成、快楽、刺激、自主独往　そして、それらを以下の 7 つにまとめ直している（連続環状形では、隣同士は共存可能な価値で、対極に位置する場合は相反する価値となる）。①調和（自然保護、自然との調和、審美、平和な世界、美の理解、味わい）②統合（伝統重視、社会秩序、寛容、従順、穏健、礼儀、敬老、国家安全、清潔、敬虔、見識、自制心、家族安泰、世間体、返報）③階層（謙虚、権威、社会的権力、富）④支配（大胆、自己目標選択、独立、影響力、社会認識、有能、成功、意欲的）⑤情的自律（変化に富んだ人生、享楽、楽しい人生、刺激的生活）⑥知的自律（偏見のない、創造性、自由、好奇心）⑦平等（誠実、社会正義、責任、平等、運命を受け入れる、忠実、有益）

(7) トリアンディス（1995、2004）

トリアンディスらは韓国と米国イリノイ州の大学生にアンケート調査を行い、次の4つの集団主義と個人主義の尺度を作成した。①縦型集団主義（不平等を受入れる）、②横型集団主義（平等主義）、③縦型個人主義（不平等を受け入れる）、④横型個人主義（平等主義）　ここでは、個人主義は「楽しい生活」を、集団主義は「両親や年長者を尊敬する」を重要視する。そして、前者がゲマインシャフト、後者がゲゼルシャフト（テンニース、1887）の価値に近いとしている。

以上、過去の7つの価値研究の概要と特徴を整理した。(1)と(2)は、欧米や日本において価値研究の基礎をなすものとして捉えられており、ここで示された枠組みはその後、様々な修正が加えられるなどして多く用いられてきた。また(3)は最終価値と手段価値を区別することに特徴があるが、それらの区別や下位価値が多く、価値の分類に複雑さが残る。(4) は、脱物質主義の観点に立つ点に特徴があるが、渡辺（1993）が指摘しているように、その評価視点が不十分とされている。さらに(5)と(7)に関しては、集団主義・個人主義を分けて捉えることに特徴を持つが、高野（1997）が述べているように、それ自体が多元的な構成概念であり、そもそも集団主義の通説にとらわれ過ぎている側面がある。

このように、各時代において、その社会特性を踏まえた価値を捉えようとする研究がなされてきた。しかしながら、本研究が着目する生活空間への着目が十分でないといった点、さらには発表時期が古く現代社会に適合していないといった点がある。こうした欠点を補い、現代において幅広く用いられているのが、本研究の分析において用いる(6)のシュワルツである。

シュワルツは社会心理学の領域において、幅広く知られ、かつ、最も発展していた価値理論として位置づけられている（坂野、2012、Parks & Guay, 2009）。シュワルツの価値観モデルは、10か国における価値観諸項目の相互間関係の構造の比較分析という課題においては、少なくとも、その基本的な枠組みを提供するものであることが確認できる（真鍋、2017）。さらに、”Basic Human Values”といったところに焦点を合わせるシュワルツの研究が多くの研究者の関心を集め、世界の様々な国や地域において、シュワルツの価値観研究をレファレンス・スタディとして、その線上で様々な理論的・実証的研究が行われるようになった（真鍋、2020）。坂野や真鍋のほかにも近年、シュワルツのモデルを用いた研究が数多く展開されており[3]、シュワルツが整理した分析軸を用いることで現代社会において深い考察が可能になると考えられる。

Ⅲ. 研究の方法

1. 分析方法

9 人の日本における国際移住者（日本への国際移住経験者も含む）による日本の生活空間に関する著作（2001～2019）から、KJ 法により、一つのアイディアやテーマを含む記述を一単位とし、

形容詞（句）を中心とする評価・判断記述をカード化し、シュワルツの価値類型に沿って分類した。具体例を示すと、著者が「日本は経済成長と土建業のためにすべてを犠牲にしてきた」と批判している場合、著者の優先価値は自然保護を前提とした「調和」となる。また、著者が「インドでは、ビジネスマンに肩書があれば、若くても大切にするし、なければほとんど無視することを認め、現在でもステイタス・ランキングが地域社会だけでなく企業原理であり続けている」とした場合、著者の価値志向は「階層」となる。そして、分類したものを、カードの数に応じてどの価値への言及が多いのかを把握する。これにより各著書の日本の生活空間を通した価値志向の特徴を把握するとともに、シュワルツの 7 つの価値志向を用いて調査分析することの妥当性を確認し、さらに該当しないカードを抽出し、価値意識を測る上の新たな分析視点を得る。

9 人の著者及び著作物は以下の通りである（Table1）。

Table 1. 調査対象の著作・著者

	著者	国籍	生年	定住年数	職業	著作	出版年	出版社
⑴	ALLISON Anne	US	1950	8	研究者	Millennial Monsters	2006	University of California Press
						菊とポケモン	2010	新潮社
⑵	ATKINSON David	UK	1965	30	コンサルタント、会社役員	日本人の勝算	2019	東洋経済新報社
⑶	CHIA Dennis	Singapore	1987	9	会社員	Japan from Inside	2013	Dennis Chia
⑷	CRESCINI Anne	US	1974	20	研究者	Barefoot Gaijin	2014	Amazon.com
⑸	HELM Leslie	US	1955	30	ジャーナリスト	Yokohama Yankee	2013	Chin Music Press
⑹	JOYCE Colin	UK	1970	14	ジャーナリスト	How to Japan	2009	NHK出版
						「ニッポン社会」入門	2006	NHK出版
⑺	KERR Alex	US	1952	48	コンサルタント、作家	Dogs and Demons	2001	Penguin Books
⑻	MILNER Rebecca	US	1980	18	作家	Jon's Chopsticks	2012	IBCパブリッシング
⑼	SHARMA M. K.	India	1955	2	会社員	喪失の国、日本	2001	文藝春秋社

2. 対象サンプル（著者、著作物）の選択方法

対象とした著作が書かれた時期は、2001~2019、つまり、現代を代表する。そして、著者が日本の生活空間、日本人の生活信条、生活習慣、日本の社会制度に精通していると考えられる前提として日本に定住している、または、2 年以上定住経験のある外国籍の国際移住者とした。その地域は、全員、大都市または大都市圏となった。また、著者の社会層として、職業はコンサルタント、大学

教員、ジャーナリスト、作家、会社員となっている。年齢は 1950~1980 年代生まれ、男女比は男性 6 人、女性 3 人となった。

まず、サンプルの代表性を考えると、日本への国際移住者のうち、2001~2019 の日本の社会・生活に関する著作物を出版している数は極めて少ない。さらに、日本の出入国管理制度下では、在留資格が得られる職業は限られる。従って、コンサルタント、大学教員・研究者、ジャーナリスト、作家、会社員に限定された。最後に、エスニシティ、年齢などの類型に関するカバレッジをできる限り多様にした（見田、1965）。

Ⅳ. シュワルツの価値志向モデルと 9 著作の分析結果

1. シュワルツの価値志向モデルのプロトタイプ

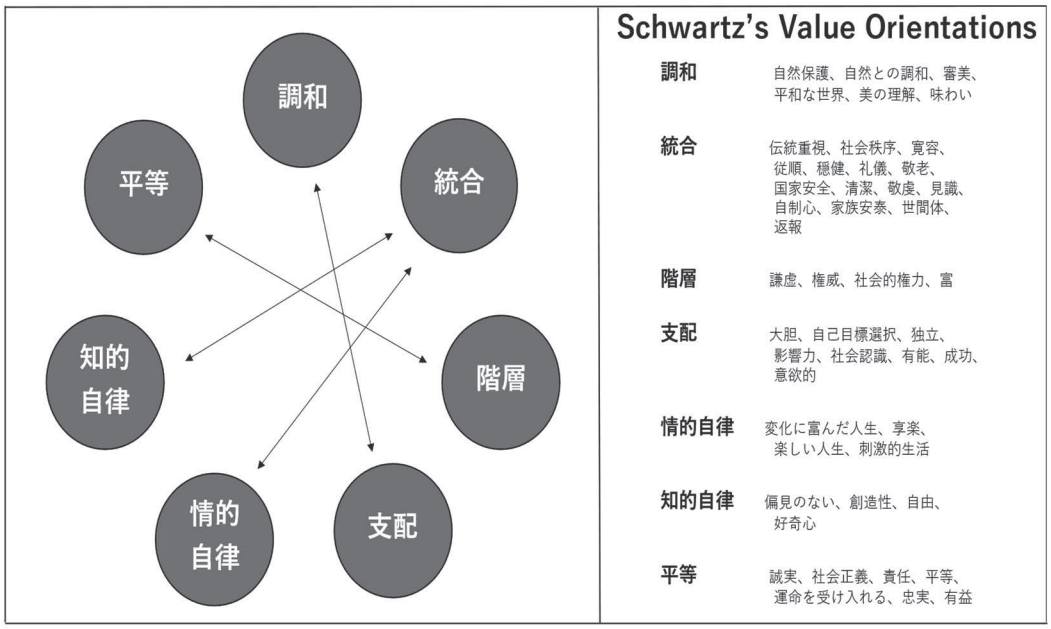

Figure 1. シュワルツの価値志向プロトタイプ

（出典：Cultural Dimensions: Prototypical Structure by S. H. Schwartz, 2006 より筆者が作成）

プロトタイプでは、それぞれの価値の優先度は、同じ円の大きさで、等しいものとなっている。また、連続環状形の配置について、隣接している領域は相互交換的な類似関係にあり、対極にある領域は対立関係である。

2. 9著作上の価値志向の分析結果

分析対象に選定された9人の著者の著作上の価値志向は、以下のTable 2の通りである。

Table 2. 著作別価値志向

	著者・著作	キーフレーズカード枚数（割合）										
		統合	階層	支配	情的自律	知的自律	平等	調和	その他	（共同体）	（多様性）	合計枚数
(1)	ALLISON Anne	3 (6%)	0 (0%)	10 (**21%**)	2 (4%)	23 (**47%**)	0 (0%)	7 (**14%**)	4 (8%)	3 (6%)	1 (2%)	49
	菊とポケモン											
(2)	ATKINSON David	6 (13%)	2 (5%)	9 (**20%**)	0 (0%)	10 (**22%**)	17 (**38%**)	1 (2%)	0 (0%)			45
	日本人の勝算											
(3)	CHIA Dennis	4 (**19%**)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (14%)	0 (0%)	8 (**38%**)	6 (29%)	6 (**29%**)		21
	Japan from Inside											
(4)	CRESCINI Anne	2 (10%)	0 (0%)	8 (**38%**)	0 (0%)	5 (**24%**)	2 (10%)	1 (4%)	3 (14%)	2 (**10%**)	0 (0%)	21
	Barefoot Gaijin											
(5)	HELM Leslie	6 (**17%**)	3 (8%)	14 (**40%**)	0 (0%)	7 (**20%**)	2 (6%)	0 (0%)	3 (9%)	1 (3%)	2 (6%)	35
	Yokohama Yankee											
(6)	JOYCE Colin	3 (8%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (**19%**)	18 (**49%**)	0 (0%)	5 (**13%**)	4 (11%)	4 (**11%**)		37
	How to Japan											
(7)	KERR Alex	0 (0%)	5 (9%)	17 (**30%**)	1 (2%)	24 (**43%**)	1 (2%)	5 (9%)	3 (5%)	(1 (2%))	(1 (2%))	56
	Dogs and Demons											
(8)	MILNER Rebecca	2 8%)	0 (0%)	6 (**23%**)	9 (**35%**)	4 (15%)	0 (0%)	2 (8%)	3 (11%)		3 (**11%**)	26
	Jon's Chopsticks											
(9)	SHARMA M. K.	10 (**22%**)	12 (**27%**)	0 (0%)	0 (0%)	12 (**27%**)	7 (15%)	4 (9%)	0 (0%)			45
	喪失の国、日本											

(1) Anne Allison の「菊とポケモン」は日本語版は2010年、英語版は2006年に出版された。英語では"Millennial Monster"となっている。日本がポップカルチャーの主要輸出国となるまでの道筋を解き明かす内容である。上位にくる価値は、知的自律47%、支配21%となっている。

(2) David Atkinson はオックスフォード大学では「日本学」を専攻した。「日本人の勝算」は、ビジネスコンサルタントとして、海外の多くの論文を引用しながら、日本経済の立て直しの方策をまとめたレポートである。上位価値は、平等38%、知的自律22%となっている。

(3) Dennis Chia はシンガポールから大学生として日本に移住し、卒業後、日本の大学院入学前に日本 47 都道府県を回り、英語と日本語でまとめたエッセイ集である。旅行記とは異種の、各地での人とのふれあいを中心に日本の魅力について語る内容である。上位価値は、調和38%、その他29%、統合19%となっている。

(4) Anne Crescini の"Barefoot Gaijin"は邦訳は出版されていない。北九州市の言語学が専門の大学教員で、ブロガー、コラムニスト、作家、コメンテーターとしても活躍する。本書は、日本での暮らし一般に関するエッセイを15のテーマに分けて書き綴ったものである。出版は2014年であるから、東日本大震災後であるが、日本人の生活信条を根源的にとらえようとするエッ

セイである。上位価値は、支配 38%、知的自律 24%となっている。

（5）Leslie Helm は横浜に生まれ育ちながら米国と日本を行き来し、今は米国に暮らす。”Yokohama Yankee”では、ヘルム家 5 代の歴史を自身を含めた混血の子孫たちの生涯を通して描いた。特に、外見が外国人の混血の自分をアイデンティティの模索を通して見つめなおし、ジャーナリストとしての思いを吐露する。上位価値は、支配 40%、知的自律 20%となっている。

(6) Colin Joyce は英国の新聞記者時代に東京特派員として定住経験を積んだ。日本社会での日常をユーモアを交えて切り取ったエッセイである。先に出版された（2006）日本語訳、『「ニッポン社会」入門』につづいて 2009 年、英語版が出版された。上位にくる価値は、知的自律 49%、情的自律 19%となっている。

(7) 日本を愛する Alex Kerr の”Dogs and Demons”は 2001 年に出版された。高度成長期を経て世界をリードするような新文明を築こうとした日本は 1990 年代に失速した。バブル崩壊を引き金に、本質的な近代化に失敗した原因として、慢性的・長期的な日本社会が抱える問題を、伝統文化破壊と結び付けて描いた著作である。邦題は「犬と鬼」である。上位の価値は、知的自律 43%、支配 30%となっている。

(8) Rebecca Milner は 2002 年から東京在住。主に旅行や異文化コミュニケーションについて雑誌、新聞などに寄稿するフリーライターである。スタンフォード大学でアメリカ・ヨーロッパ文学を専攻。本書のサブタイトルは「ガイコク人ニッポン体験記」である。上位価値は、情的自律 35%、支配 23%となっている。

(9) M. K. Sharma はインドの貧しいバラモンの家に生まれ、1992 年から 1994 年にかけて市場調査会社のビジネスマンとして東京に駐在し、帰国後、翻訳を経て、日本論「喪失の国、日本」が出版された。サブタイトルは「インド・エリート・ビジネスマンの日本体験記」である。上位にくる価値は、階層 27%、知的自律 27%、統合 22%となっている。

V．分析結果のまとめ

9 著作の分析結果からわかることは、第一に、カード化されたキーフレーズ全 335 個の多くが（309／335 枚）シュワルツの示す 7 つの価値志向に当てはまることである。全体の 92%が 7 つのいずれかに解釈でき、当てはまること確認できた（Table 1 参照）。本調査から、異なる価値意識をもつと考えられる国際移住者の価値を測る指標としてシュワルツが示す 7 つの価値志向は妥当であることが確認できた。また、シュワルツは、国や地域ごとに価値志向に特性をもつことを示しているが、9 著作のそれぞれにおいて概ね、シュワルツが示す国ごとにその特性が現れていた（Figure 5 参照）。

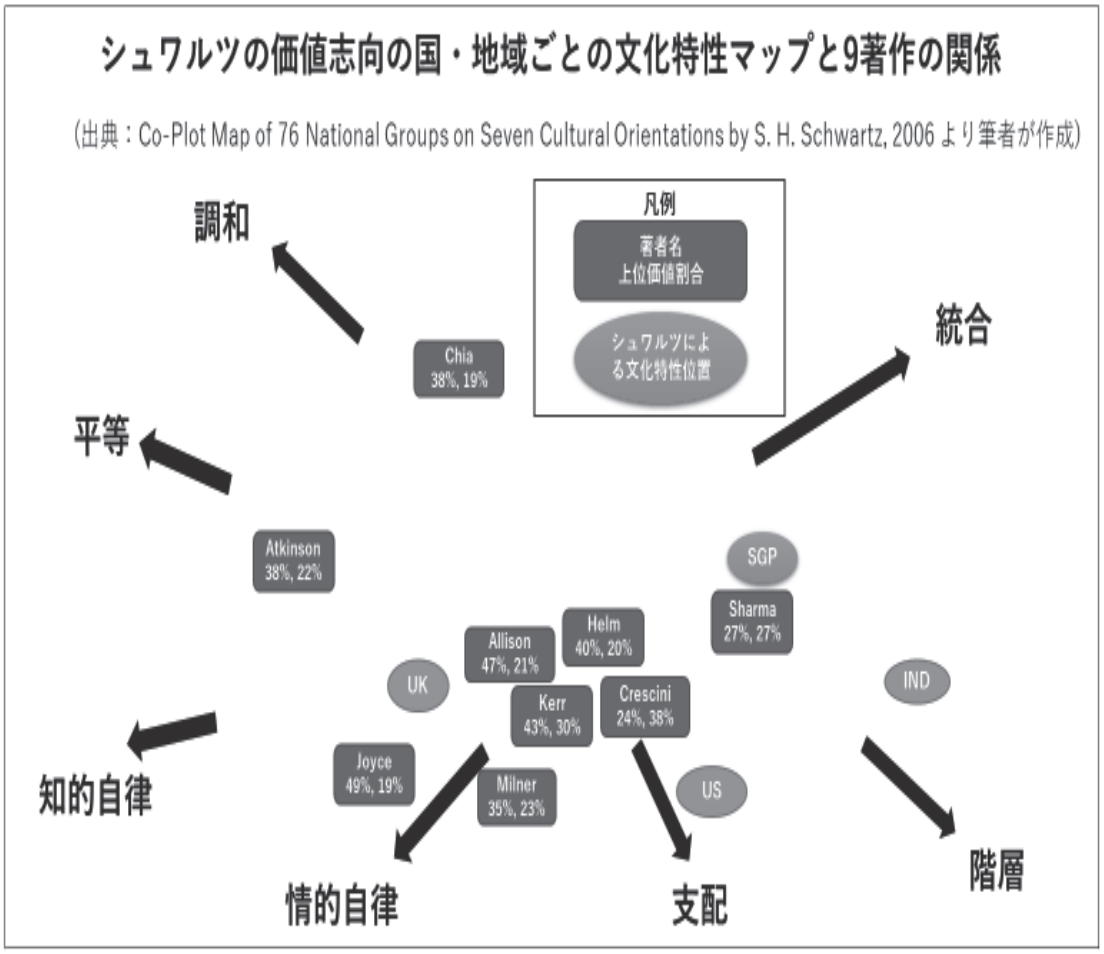

Figure 5. 9著作の価値志向マッピング

Figure 5. は、シュワルツの価値志向の国や地域ごとの文化特性マップを参考に、9 著作の位置を同マップ（楕円が示す 4 か国（英国 UK、米国 US、インド IND、シンガポール SGP）の位置を筆者がプロットした）上に筆者がそれぞれの著作の上位 1～3 位の価値志向を参考にマッピングしたものである。本調査で整理した上位価値に着目すると、文化ごとの価値の優先順位の傾向と、シュワルツの価値志向の文化特性マップとの類似性が概ね確認できる。

9 著作の中から、本稿では、著作が書かれた時期が近く、キーフレーズの総数も多く、また日本の生活空間に関する記述の多い著作について分析を詳しく把握する。具体的に、カード数の分類から最も傾向が顕著に現れている 3 著作 Alex KERR (US) “Dogs and Demons” 2001、Colin JOYCE (UK) “How to Japan” 2009、M. K. SHARMA INDIA『喪失の国、日本』2001 を例に見てみると Figure 2~4 のようになっている。

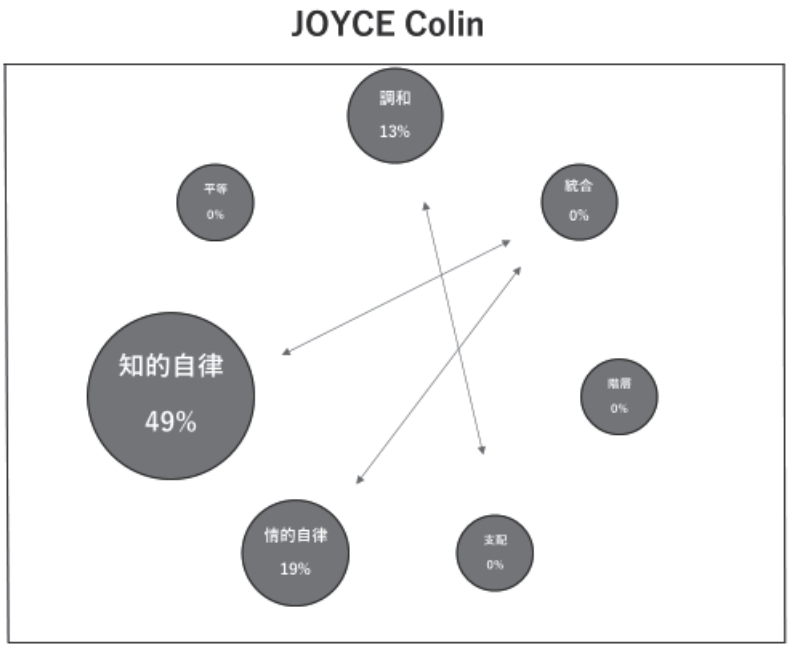

Figure 2. “How to Japan” の価値志向

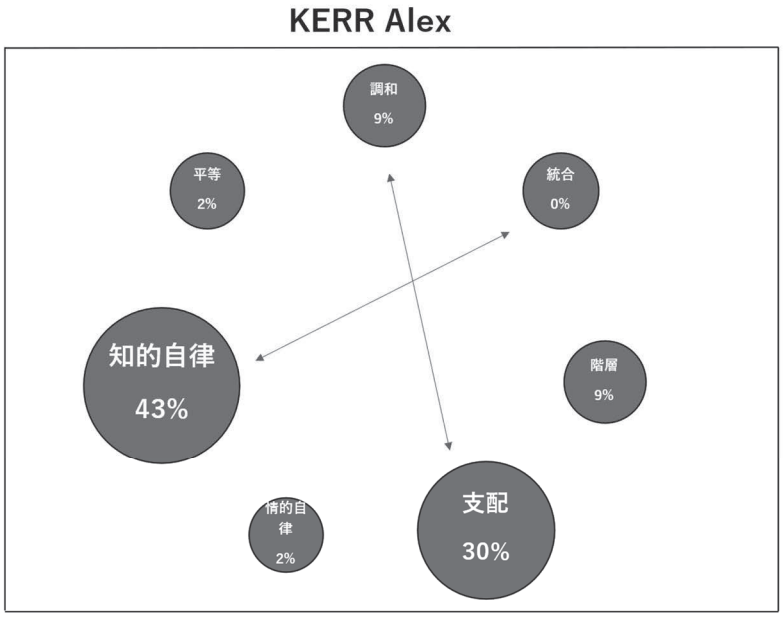

Figure 3. “Dogs and Demons” の価値志向

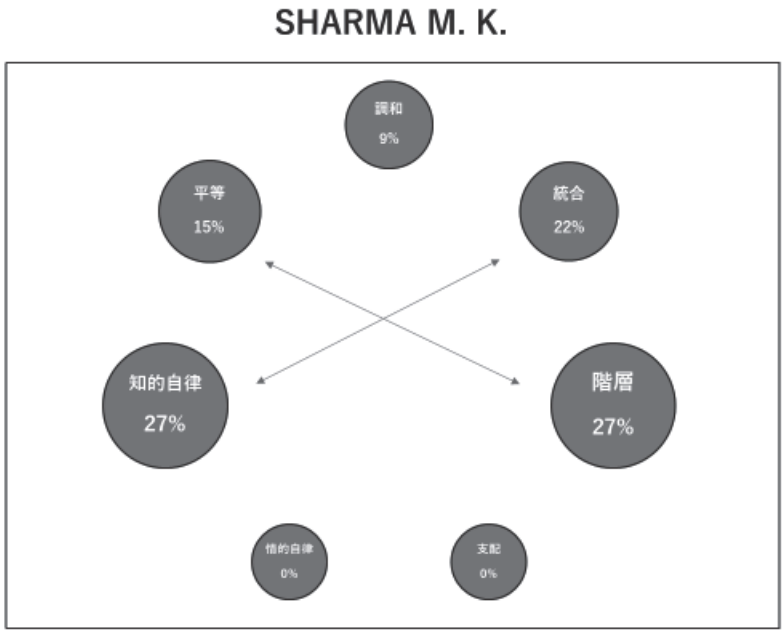

Figure 4.　「喪失の国、日本」の価値志向

シュワルツの 7 つの価値志向マップと本研究で得られた 3 著作の価値志向の結果を照らし合わせると、米国、英国、インドの 3 か国のシュワルツによる価値志向の文化特性と、3 著作の価値の優先順位の傾向の間に類似性を確認できた。米国人（Alex Kerr）は知的自律（偏見のない、創造性、自由、好奇心を重要視する）と支配（大胆、自己目標選択、独立、影響力、社会認識、有能、成功、意欲的を重要視する）の優先度が高い。英国人（Collin Joyce）は知的、情的自律（偏見のない、創造性、自由、好奇心、変化に富んだ人生、享楽、楽しい人生、刺激的生活を重要視する）と調和（自然保護、自然との調和、審美、平和な世界、美の理解、味わいと重要視する）への優先度が高い。インド人（M. K. Sharma）は、階層（謙虚、権威、社会的権力、富を重要視する）と知的自律への優先度が高い。

最後に、シュワルツがまとめた 7 つの価値志向（優先価値）にあてはまらない価値について、調査結果の Table 2. に示したその他のキーフレーズに触れたい。これらは、シュワルツらが作成した 57 問にわたる質問紙（2013 バージョン）の中のいずれからも抽出されない概念が含まれている可能性を示唆している。全体としては、その他が占める割合は 8%であるが、Chia の共同体 29%、Joyce の共同体 11%、Milner の多様性 11%、を見ると、各著作の中で占める割合は些細とは言えない。ここでは、先行研究で触れた個人主義（individualism）に対する集団主義（collectivism）とは異種の共同体主義（communitarianism）そして、排外主義や同化主義の対極に位置する多様性の価値を重んずる多文化主義（multiculturalism）を優先価値とする価値意識が存在する可能性が示唆された。ここで、それらのシュワルツマップ上の位置を考えてみると、共同体主義は「調和」

と「統合」の中間地点、多文化主義は「知的自律」と「平等」の中間地点あたりになると推察される。

VI. おわりに

今回の分析結果から次のようなことが明らかとなった。個人の価値志向に生まれ育った文化による価値志向の特性が表出することを前提とすると、シュワルツ理論を価値意識の分析枠組みとして応用することの合理性は確認されたと考えられる。また、アメリカ、イギリス、インドの3か国であるが、シュワルツの7つの価値志向上の国・地域ごとの文化特性マップと本研究で得られた3つの著作の価値志向の傾向の類似性が確認できた。さらに、今回の分析結果から国際移住者の価値意識を測る際に、新たに留意する点があることが示された。それは、9人の著者のうちChiaや、Crescini、Joyce、Milnerのように、相対的に年齢層の若く、出版時期が2010年前後以降の比較的最近の著作のものに、共同体主義（Communitarianism）や多文化主義（Multiculturalism）の価値を重んじるキーフレーズが確認されたことである。これらは、シュワルツらが作成した質問項目群からは抽出されない優先価値となる。そして、シュワルツの7つの価値志向のいずれにも当てはまらない。つまり、新しい価値志向の存在の可能性であると推察され、今後調査を進める際に、この点に関する評価項目を具体的に検討したり、解釈をする際に十分な配慮が必要ということである。本稿では、著者の選考にあたっての共通項として日本定住経験とホスト文化の理解度への関係性には触れていない。しかし、真の理解は、経験を通して得られると考えるのが自然であろう。さらに、国際移住者が日本社会を見る視点や評価する基準（価値意識）に、出身の文化（エスニシティ）の文化特性が与える影響は大きいという点に関しては異論をはさむ余地はないが、日本定住経験と価値意識の変容との関係に関しては、今後の調査や研究が必要となる。

今回は、日本における国際移住者の価値意識を測るための基礎となる分析視点を得ることができた。今回得られた知見をもとに、今後は、具体的に、出身文化の違いによって、国際移住者が日本の生活空間においてどのような障害をもちやすいのか、また出身文化の違いに関係なく生じやすい障害にはどのようなものがあるのか、またそれらの障害を軽減するための国際移住者に対する情報提供のあり方といった観点から現実社会に応用可能な調査分析を行なっていく必要がある。さらに、それらの障害の要因の可能性として、国際移住者とホスト側日本人の価値志向の差異をシュワルツの価値志向理論をもとに明らかにすることも重要である。

注

[1] Glossary on Migration (2019) International Organization for Migration

[2] 本研究が扱う「生活空間」とは、暮らしの場（家庭、職場、余暇活動の場など）および、それらを取り巻く建築物、人の生活信条・習慣や社会システムを含めた「生活を規定する環境・制度」を指す。（村松、石井、2020）

[3] 真鍋は、シュワルツの価値研究の理論的・実証的研究として、シュワルツの概念枠組みのもとづく質問紙調査をケルン大学、北海道大学、青山学院大学の大学生を対象に実施して、方法論的側面に焦点をあてた国際共同研究を実施した。また、シュワルツの概念枠組み（1992）を利用した応用的研究として、柏木のシュワルツの 10 種類の価値と 57 の質問項目を使用して、リーダーの成長と価値観に関する調査を行った研究がある（柏木、2009）。

引用文献

Allison, Anne, 2010, 菊とポケモン、新潮社

Atkinson, David, 2019, 日本人の勝算、東洋経済新報社

Chia Dennis, 2013, 日本人に思い出してもらいたいニッポン

Crescini, Anne, 2014, *Barefoot Gaijin: Loving Japan Without Losing Myself,* Amazon

Helm, Leslie, 2013, *Yokohama Yankee,* Chin Music Press

Hofstede, G., 1980, *Culture's consequences: International differences in work-related values.* Beverly Hills.

Hofstede, G., 1991, *Cultures and organizations: Software of the mind.* New York: McGraw-Hill. 邦訳, G.

Inglehart, R., 1990, *Culture shift in advanced industrial society.* Princeton University Press

Joyce, Collin, 2009, *How to Japan,* NHK 出版

Kerr, Alex, 2001, *Dogs and Demons,* Penguin Books

Kluckhohn, 1951, Values and value orientations in the theory of action. In T. Parsons and E. A. Shils (Eds.), Toward a general theory of action. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Kluckhohn, F. R. & Strodtbeck, F. L. (1961). Variations in value orientations. Evanston, IL: Row, Peterson.

McNeil, Baye, 2013, *LOCO in Yokohama,* Hunterfly Road Publishing

Parks, L., & Guay, R. P. 2009, Personality, values, and motivation. Personality and Individual Differences, 47, 675-684.

Rokeach, M. 1973, The nature of human values. New York: Free Press.

Schwartz, S. H., 1992, Universals in the Context and Structure of Values: Theoretical Advances and Empirical Tests in 20 Countries in M. Zanna ed., Advance in Experimental Social Psychology, 25, Academic Press.

Schwartz, S. H., 2006, A Theory of Cultural Value Orientations: Explication and Applications, Comparative Sociology, Volume 5, issue 2-3, Koninklijke Brill NV, Leiden

Schwartz, Shalom H. et al., 2012. Refining the Theory of Basic Individual Values. Journal of Personality and Social Psychology, 103（4）

Sharma, M. K. 2001, 喪失の国、日本―インド・エリートビジネスマンの「日本体験記」、文藝春秋

Triandis, H. C. 1995, Individualism and Collectivism, Westview Press 訳：神谷・藤原『個人主義と集団主義』北大路書房

Triandis, H. C. Dimension of Culture Beyond Hofsteds. In Vinken, H, Soeters, J., & Ester, P. (Eds.) *Comparing Cultures: Dimensions of Culture in a Comparative Perspective.* Leiden, Boston: Brill

柏木仁、2009、リーダーの成長と価値観に関する定性的研究―価値観の止揚的融合―、経営行動科学 22（1）、35-46

川喜田二郎、1967、発想法ー創造性開発のためにー、中央公論社

金明秀、2015, 日本における排外主義の規定要因　フォーラム現代社会学 14

坂野朝子・無藤崇、2012、「価値」の機能とは何か：実証に基づく価値研究についての展望、心理臨床科学、第 2 巻、第 1 号、68-80

高野陽太郎、1997、日本人の集団主義とアメリカの個人主義、心理学研究 68⑷312－327

テンニース、フェルディナンド、1887、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、杉之原寿一訳、岩波文庫 1957

平井美佳、1999、「日本人らしさ」についてのステレオタイプ―「一般の日本人」と「自分自身」との差異、実験社会心理学研究第 39 巻、第 2 巻

ホーキンス、ヴァージル、2018、排外主義の現実とイメージとのギャップ、未来共生学 5 、pp. 125-139

ホフステード（1995）『多文化世界：違いを学び共存への道を探る』岩井紀子, 岩井八郎 訳　有斐閣

真鍋一史、2017、Schwartz の「価値観モデル」の実証的な検討―国際比較の視座からのデータ分析―、日本社会学会

真鍋一史、2020, S. Schwartz の概念枠組みにもとづく価値観の国際比較　関西学院大学紀要 133、pp.87-107

見田宗介、1962、価値意識の理論　弘文堂
見田宗介、1965、質的なデータ分析の方法論的な諸問題、社会学評論
村松英男・石井大一朗、2020、宇都宮市定住外国人の価値意識
渡辺伸一、1993、脱物質主義的価値再考、年俸社会学論集 1993 巻 6 号